

A- I -05 人工呼吸器回診により当院人工呼吸療法に見られた変化

熊本赤十字病院

森 正樹 黒田 久美子 黒田 彰紀
高毛禮 敏行 松森 ひとみ 江藤 信一

【はじめに】

当院はベッド数480床、急性期型の医療を展開、人工呼吸器装着患者は年間350名程度発生している。2005年5月よりRespirator Support Team (RST)を立ち上げて人工呼吸器装着患者の回診を始めた。RSTによる回診で当院における人工呼吸療法に変化が見られたので報告する。

【チーム構成】

呼吸器科医師2名 臨床工学技士1名 看護師1名
理学療法士1名。

【方法】

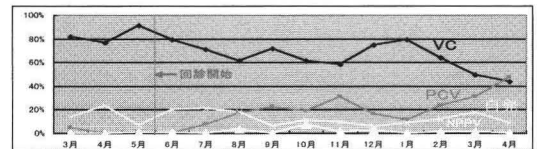
回診は週1回。人工呼吸器の設定条件やweaningを中心に人工呼吸管理全般について助言を行う。対象患者は小児科と呼吸器科を除いた全ての人工呼吸器装着患者。尚、月曜日から金曜日にかけて1日1回、RSTの臨床工学技士が巡回業務を行い人工呼吸器の設定条件や各パラメータを記録し回診時のデータとして活用する。また巡回時、問題があった場合はチームの医師に報告を行い臨時での対応も行う。

【活動状況】

期間05年5月～06年4月。回診回数54回、対象患者延べ315名。臨床工学技士による巡回対象患者延べ2361名であった。

RST回診時に行った人工呼吸器設定条件の変更内容は多岐に亘るが、上位では、PS圧に関する変更が40件と最も多く、次いでPCVの吸気時間、PEEP圧に関する変更の順であった。換気方式をVCVからPCVへ変更した症例が13件あった。

【結果】



グラフは05年5月から06年4月までの換気方式の件数をまとめたもので、VCV、PCV、自発、NPPVに分類。同様に換気モードの集計も行った。回診開始以前、換気方式ではVCV、換気モードではSIMVが共に約80%の頻度で使用されていた。回診を始めた5月以降、徐々にPCV症例の増加が見られ06年4月には当院では初めてPCV症例数がVCV症例数を上回った。換気モードに大きな変化は見られなかったが、回診開始以前では使用された事が無かったBILEVELモードの使用が見られた。またBiPAP VisionによるNPPVもわずかに増加していた。

【考察】

回診開始以前から当院ではPCV、NPPV、BILEVELといった多様な人工呼吸管理を行える人工呼吸器を所有していたが、VCVによるSIMVモードという様な人工呼吸管理が行われていた。RSTでは回診時にPCVによる管理が望ましいと判断された症例に対してPCVへの変更と管理上のサポートを行った。また、NPPVの啓蒙にも力を入れた。今回の結果はRSTによる肺保護戦略に基づいた人工呼吸管理の啓蒙とサポートを行った結果と考える。

【まとめ】

RSTの活動により診療科の枠に囚われず、肺保護戦略に基づいた人工呼吸管理の普及が進んだ。